国立大学法人 山口大学
農学部
Faculty of Agriculture, Yamaguchi University
生物資源環境科学科
Biological and Environmental Sciences

応用動物生態学研究分野

Applied Animal Ecology

細井　栄嗣（hosoi@yamaguchi-u.ac.jp）

応用動物生態学とは動物の生態を研究し、得られた知識をその動物や環境を保護・管理するために応用していこうとする分野です。遺伝的多様性から食物の栄養価、行動圏の広さや生息地の利用形態まで幅広い研究を行っています。近年は野生動物による農林業被害が全国的問題となっており、ここ山口でもいかにして人と野生動物の共存を図るかが大きな課題です。研究対象は随時変化しますが、現在はシカ、イノシシ、クマ、ヤマネなどです。

研究テーマ

1．西日本のニホンジカの系統関係
2．イノシシの生態（ヌタ場利用）
3．分布を拡大したクマの食性　など

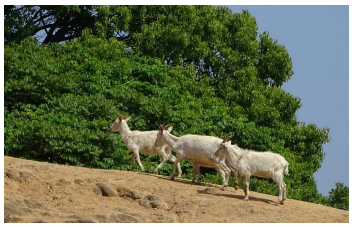
シカとイノシシは山口県における代表的な農林業の害獣です。県下全域に生息するイノシシに対して、シカは県西部に分布が限られていたのが、近年分布を拡大し、一部は島根県に進出していることが遺伝子の研究から明らかになってきました。宮島ではシカの過密化が問題であり、植生の破壊が進んでいます。
（画像はどちらも山口県農林総合技術センター提供）

クマは害獣であるとともに希少動物でもあるため、保全の努力が必要です。山口、広島、島根の３県共同で保護・管理が行われています。当研究室では山口県内で捕獲されたクマについて計測、齢査定、食性研究を行うとともに、クマの餌となる植物の生産量を予測し、クマの出没頻度との関連を調べています。

（画像上：ヤマネ用巣箱に現れた個体。自動撮影です。人がいる時はクマは姿を見せません。画像下：クマの爪跡）

ヤマネは保護が必要な希少動物です。国の天然記念物であるとともに、山口県レッドリスト掲載種でもあり、その生態はまだ謎に包まれています。個体数が非常に少ないと考えられる山口県のヤマネの生態を解明し、保護につなげるための研究を行っています。（画像は巣箱に繁殖用の巣材である杉の樹皮を運びこむメスのヤマネと巣箱内の様子。右下は別の巣箱に現れ、その後破壊して中のヒメネズミ親子を襲ったテン）

カワウはアユを食害する鳥として厄介者扱いされていますが、山口県内でのコロニーやねぐらの場所はわずかしか特定されていません。その生態や生理も未知な点が多く、食害軽減のための多角的な調査研究を行っています。



山口県には野生化したヤギが住む無人島があります。天敵がおらず人による捕獲もない環境で、餌不足により植生の破壊が進んでいます。個体群管理を行わないで草食動物を放置するとどういったことになるのか、宮島のシカ問題にも通ずるモデルケース的な特異な生態系として貴重な場所となっています。